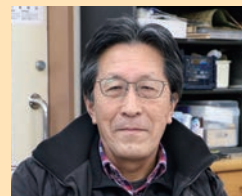


参宮ブランド擬革紙の会

和紙の表面にしわをつけて加工し、革に似せた風合いと着色を施した擬革紙は、江戸時代前期に技術が生まれました。昭和になって一度は途絶えるも、擬革紙の工芸文化を後世に伝えたいと、平成21(2009)年に「参宮ブランド擬革紙の会」が立ち上がり、技術を復元。三重県指定伝統工芸品に認定され、15人の会員が中心となって活動しています。



会長 堀木 茂さん

お問い合わせ

「参宮ブランド擬革紙の会」
 会 会 郡 玉 城 町 下 田 辺 937
 TEL 090-4232-9738
 (会長 堀木 茂さん)
 E-mail
 sancyuu_h@yahoo.co.jp

江戸時代の貞享元(1684)年、明和町新茶屋の三忠さんちゆうが、油紙を改良し、使い込むほどに革のように柔らかい擬革紙の製造をはじめたと伝えられています。三忠の子孫であり、「参宮ブランド擬革紙の会」会長の堀木 茂さんと会員の林 澄子さんにお話を伺いました。

—堀木さんは堀木家に残されていた擬革紙を展示し、資料館を開設されていますね。

堀木：和紙にしわをつくる木型や煙草入れ用の切り抜き形木、刷毛など製造に必要な道具や、江戸時代末期頃のままさまざまな煙草入れを紹介しています。平成14(2002)年にオープンしました。

動しますね。型紙に真っ直ぐに、また斜めにしたりと挟む角度を変え、そして絞る回数によっても異なった風合いに仕上がります。

堀木：単なる復元ではなく、改良し、今に受け入れられる「伊勢擬革紙」です。また紙をどの段階で着色するか、そして染まる状況も湿度などの環境によって違ったり、難しいですね。ようやく一つの工程が定まってきました。

林：革を模したものでしたので最初は黒や茶色のものでしたのですが、ベースの色を調べて種類を増やし、現在は40色以上のバリエーションがあり、カラフルになりました。



カラフルな色調の擬革紙



御朱印帳やコードバンド



普段使いのバッグや帽子



「三忠」に残された昔の写真※



2列目の左が林 澄子さん

—会員のみなさんで原紙にして出荷し、また各種製品づくりも行っていますが、人気のある商品は何でしょうか。

林：財布や名刺入れ、ブックカバーなどの小物のほか、バッグ、帽子などをつくっています。今は御朱印帳が人気があります。現代風の参宮土産ですね。明和町の「竹神社満月参り」でも好評のようです。「明和町観光商社」や「玉城町観光協会」などのバックアップもあって、ふるさと納税の返礼品にも使われたり、また伊勢内宮前の「かみなりや」での販売や、津市の「丸川商店」はネットショップを応援してくれています。

堀木：今でも常によりよい方法を模索

段々とわかってきました。今の材料では全く同じものを復元することは難しいと分かり、特に擬革紙のしわと着色の再現には苦労しました。

林：国産の和紙材料も調達が困難な時代となりましたし、現代なら職人さんはどうするだろうかという考えに切り替えました。再現したものは全く同じものではないので、「伊勢擬革紙」との名前にしました。型紙に挟んで、万力機で絞ると、材料の和紙にしわが付き、革のような表情になります。うまくいくと感



復元した木造の万力絞り

していますが、うれしい出来事もあります。擬革紙を知った若い人たちが、興味を寄せてくれたり、製造に関わりたいたいという声を聞きます。この技術や文化を後世に残していこうと活動を続けていきます。

—「夕立や伊勢のいなぎの煙草入 ぶるなる光る強いかみなり」は江戸時代の狂歌で、かみなりは夕立に鳴る「雷」と、古くなるほど光る強い「紙也」とを掛けています。時間を得て使い込まれた擬革紙は艶を帯び、良質な革のように変化します。会員の熱心な活動により、「伊勢擬革紙」としての新たな展開がはじまっています。

インタビュー…中村 元美

※印の写真は取材先から提供していただきました